

# 〈ミカン〉と〈羊〉を活かした 島づくりりに挑戦

中村 華奈子

〈団体名〉 鷺島みかんしまプロジェクト（広島県三原市）

〈事業名〉 耕作放棄地での羊飼育による持続可能な島の活性化プロジェクト

## ミカンを活用した交流人口の創出

広島県佐木島は、「日本一新幹線の駅から近い島」と言われる、人口約六四〇人の島です。春は満開の桜や菜の花が咲き誇り、夏は海水浴で賑わいます。秋から冬にかけては、島全体がミカンの黄金色に輝く、自然豊かな島です。しかし、こんな魅力溢れる島でも「高齢化による人口減少」「耕作放棄地の増加」が、年々深刻度を増しています。

「鷺島みかんしまプロジェクト」は二〇一六年春、三原観光協会と連携しながら島の「観光素材開発」「活性化」を図ることを目的に発足しました。現在は、島の方々に加え、デザイナー、料理研究家、コピーライター、地域おこし協力隊OB、地元企業役員、元小売業者などさまざまな経歴を持った人たちが本プロジェクトに携わっています。「佐木島には、美味しいミカン、豊かな自然、そして島に観光客を呼ぼうと奮闘する人たちがいる。これらの

資源を活かして、島の未来を描いていこう」という想いで活動を続けています。この想いの具現化に向け、五年間、「耕作放棄地の解消」「商品開発」「イベント開催」「空家活用」の大きく分けて四つの活動（島の活性化策）を展開してきました。これらの取り組みは、一見バラバラに見えますが、「島に来て↓島を知って↓島でゆつくりして↓島でお土産を買って帰ってもらおう」という循環を創出することで、新たな協



佐木島：三原市の南約3kmの瀬戸内海にある面積8.71km<sup>2</sup>、周囲18.2km、人口645人(令和3年4月末日現在)の島。標高268mの大平山麓に柑橘畑が広がり、平坦地ではワケギやスイカ、メロンが栽培されている。平成2年に始まったトライアスロン大会は、住民がボランティアで運営を支えている。

## 《鷺島みかんじまプロジェクトの概念図》



力者を獲得し、さらなる島の活性化につなげていく流れとなっています。私たちは、この事業の推進にあたり、特産であるミカンの活用を中心に据えました。

### 農作業の負担軽減のため羊を飼育

佐木島の農業は、斜面での真夏の草刈り、秋から冬にかけての収穫など重労働であるにもかかわらず、収入は低く安定しないという課題を抱えています。そのため、若者は農業ではない別の仕事を求めて島を離れるようになり、島内の耕作放棄地が増加しています。という悪循環に陥っています。私たちは、そうした畑を借り受け、島内外のボランティアとともに維持管理し、微力ながら放棄地の解消に努めました。

耕作放棄地を、人手をかけず（効率よく）、楽しく、話題になる形で減らしていきたい。そこで目を向けたのが、羊の飼育による除草でした。動物



ボランティアで耕作放棄地を減らす取り組みを続けている。

を活用した除草において、一般的に連想されるヤギではなく、羊に注目したことには理由があります。佐木島では毎年夏にトライアスロン大会を開催しており、二〇〇三年大会の際にニュー

ジーランドの強豪・サイモン・ブリテン選手を招待しました。しかし、残念ながら同氏は大会直前に体調を崩し、出場することなく帰郷、その翌〇四年に肺がんのため亡くなりました。佐木島の皆さんが、サイモン氏をつけるはずだったゼッケンを「来年は島に戻ってきてほしい」という言葉とともに彼の両親に渡したところ、一年後、彼の父と兄が大会に出場、無事完走を果たされました。また、この話を知った広島・ニュージーランド友好協会が、佐木島とニュー

ージールランドの諸都市との交流を支援。島の住民が島内にオリブの木を植えるなど、同国との交流が続けられてきた結果、二〇一六年に三原市とパーマストン・ノース市が交流都市関係を結ぶまでに至りました。このような経緯もあり、私たちは羊を飼うことで、島の方々とニュージールランドの温かいつながりも表現できると考えました。

### 耕作放棄地の削減と島の認知度の向上

それでは、これまで飼育したこともない羊をどうやって育てるのか。当初は、羊を飼うことに反対する声も少なからずありました。しかし、実際に飼育を始め、「みかん」「れもん」と名付けて育てるうちに、島の方々の意識も変わり、もつとも反対をしていた方が今では一番の理解者となつています。この結果、羊に除草してもらうことで耕作放



佐木島で育つ「みかん」と「れもん」。

棄地を減らしていこう、という当初の目的の遂行に加えて、島人自身の手で耕作放棄地を減らし「羊とともに過ごす島の憩いの場」を作るという計画も立ち上がりました。動物の力の大きさと、それにより地域の方々が元気になつていく姿を目の当たりにした瞬間でした。

この羊の存在は、島のPR面でも効果的でした。羊のいる島という珍しさからメディアの取材を多数受けるようになりました。農業関係の新聞などにも取り上げられたことで、島の皆さんのモチベーションの向

上にもつながりました。同時に、本プロジェクトをさまざまな方に広く知ってもらう機会にもなっています。

今年の二月には飼育している羊の毛を使用したオンラインワークショップを開催しました。近隣の呉市や福山

市などに留まらず、東京など県外からの参加もあるなど、コロナ禍で来島がかなわない状況であっても、佐木島ファンの獲得につながったと思います。

今後も、このような新たな挑戦を続け、島のPRを積極的に行なっていきます。

### 持続可能なプロジェクトを目指して

これら新たなチャレンジができたのは、人材育成基金助成事業の支援があったからです。「やってみたい」という想いを、具体的なアクションに変え、自分たちなら「できる」ということを体験できたことに、とても感謝してい



羊の毛を使用したオンラインワークショップの様子。

## 離島人材育成基金助成事業事務局より

令和2年度は、採択した多くの事業が新型コロナウイルス感染症の影響を受けました。事業実施が見込めず助成を辞退した団体、事業を中断したり大幅な変更を余儀なくされた団体もありました。しかし、考え方次第ではそれもまた勉強です。現実には、計画通りに物事が進まないことも少なくありません。予期せぬ障害、己の努力ではいかんともし難い壁が立ち塞がったとき、どのように切り抜けるのか。そのことが問われた1年だったように思います。

そんな中、本プロジェクトは、設定した目標にうまく着地させた事業でした。申請に先立って本財団まで相談に見えたり、電話やメールで頻繁に事務局に意見を求めてこられ、その熱意に応えるべく私どもも精一杯、助言させていただきました。どのようにしたら当初の目標を達成できるか、代替手段はないかと、臨機応変にできることを着実に実行に移し、その実績をもとにステップアップした計画でみごと、本年度も本事業に採択されました。

事務局には、過去の採択事業の蓄積から得た知見があり、地域づくりに関わった実践体験のある職員もおります。本プロジェクトのように、事務局を積極的に活用していただければ幸いです。  
(水)



中村華奈子 (なかむら かなこ)

昭和56年三原市生まれ。百貨店勤務を経て、平成24年に地元でUターン。三原観光協会にてコーディネーターとして働く中で、佐木島に関わり「鷺島みかんじまプロジェクト」を開始。現在は地域商社「株式会社luft」代表として、商品開発やイベント企画などを手がける。

ます。本プロジェクトの次の目標は、資金面で持続可能な団体になることで、島の宝であるミカンを柱として、収益をあげながら、羊の恵みをさらに活用していく体制を構築していかうと考えています。本年度も継続して同助成事業に採択していただけたので、自

立への道に近づくような企画に取り組みたいと思います。  
現在、私たちは、羊の助けを借りながら除草剤や農薬を使わないミカンやレモンの栽培に挑戦しています。一つずつ丁寧に、安心安全な柑橘づくりを実践することで、果実の単価を上げ、

農家の方々の収益アップを実現させることが目標です。実際、農薬・除草剤不使用の柑橘は、甘みも酸味も少しかりしていて美味しいと評判で、通常より高値で取引されています。将来的には、羊を除草だけに用いるのではなく、羊毛の販売にもつなげていかうと計画しています。

世界的にSDGs（持続可能な開発目標）が叫ばれ、持続可能な社会の実現のための取り組みが進められています。私たちも佐木島を舞台に、環境、人、そして社会の課題解決に向けて、引き続き尽力していきます。